

文献紹介

田村善次郎・宮本千晴監修，須藤 功編
『宮本常一とあるいた昭和の日本 11関東甲信越①』
農山漁村文化協会
2010年9月 222頁 2,800円＋税

本書は民俗学者の宮本常一の没後30年を記念して企画された「あるくみるきく双書」全25巻の第1回配本である。

宮本常一は1966年に近畿日本ツーリストが出資して設立された日本観光文化研究所（観文研）の所長を務めた。観文研は近畿日本ツーリストのシンクタンクであると同時に、過疎地域を立て直すコンサルタントの業務を担った。

宮本にとっての観文研は、彼の経済的庇護者であった渋澤敬三にとってのアチックミュージアムと同等の意味を持っていた。宮本は観文研に出入りする若者を日本の各地に送り込み、フィールドワークの積み重ねによって地域の民俗や歴史を記載させた。そこには宮本が生涯を通じて実践してきた、旅と観察と聞き取りの手法を次の世代に伝えるねらいもあった。

「あるくみるきく」は、観文研の機関誌的位置づけの雑誌で、1967年3月から1988年12月の263号まで刊行された。一般の旅行雑誌にみられるような商業性が、同誌にはまったくなかった。今西錦司らの文化人が熱心に定期講読する雑誌としても知られていた。写真が多用され、言葉では伝えきれない景観の相貌や人びとの表情が写し出された。緻密な観察と聞き取りに基づいた紀行文とともに、この写真の存在が、同誌の記録的価値を高めている。

誌面の多くは、観文研の所員・同人による全国各地の紀行文であった。彼らのすべてが学問的訓練を受けていたわけではなく、したがって記事の完成度にはばらつきがあった。それでも宮本は素人同然の若者の観察を、みずみずしいもの、率直で素直なものとして尊重した。

観文研の活動時期は、高度経済成長の後半からバブル経済期にかけてであり、民俗学が対象としてきた地域の民俗事象が消失する時期に重なった。観文研の所員らは、消えゆく民俗を追い求め

ると同時に、急速に変貌する地域のありさまを活写した。「あるくみるきく」の終刊から20余年を経て、同誌の記述は図らずも、変貌著しい昭和後期の記録として読み直されることとなった。

「あるくみるきく双書」の構成は次の通りである。1奄美・沖縄、2九州①、3九州②、4中国・四国①、5中国・四国②、6中国・四国③、7近畿①、8近畿②、9東海北陸①、10東海北陸②、11関東甲信越①、12関東甲信越②、13関東甲信越③、14東北①、15東北②、16東北③、17北海道①、18北海道②、19焼き物と竹細工、20祭りと芸能、21織物と染物、22けもの風土記、23漆と木工、24祈りの旅、25青春彷徨。1～17は地域別に網羅的な構成であるが、18～23は特定の生業や儀礼に焦点を当て、24・25は書き手の思いを前面に出したエッセイである。

双書は現在刊行中であるため、全体を詳細に見渡すことはできないが、そのサンプルとして本書の主な内容を紹介したい。

以下に本書の構成を示す。なお数字は「あるくみるきく」の掲載号を示す。

一枚の写真から——駅前旅館（文：宮本常一，
写真：須藤 功）152

奥利根（文：都丸十九一，写真：須藤 功）12
佐渡小木岬（文と写真：姫田忠義，写真：相沢
韶男）14

伊豆大島（文：宮本常一，写真：菅沼清美）15
筑波山麓風土記（文と写真：渡辺 武）44

伊那路をゆく（文と写真：姫田忠義，写真：須
藤 功）45

小笠原——開けゆくBONIN ISLANDS（文と写
真：姫田忠義，写真：伊藤碩男）47

宮本常一が撮った写真は語る（須藤 功）
山古志村（文と写真：須藤 功）57

秩父——峠を越えて（文：三輪主彦・野村矩子，
写真：菅沼清美）58

「一枚の写真から」と「宮本常一が撮った写真は語る」には、本書の編者である須藤功がリライトや新たな写真を加えている。他の8章は「あるくみるきく」掲載の紀行文の再録である。

冒頭を飾る「一枚の写真から」中のくいかや旅

館〉の写真は、本双書の姿勢と観点を端的に示す。〈いかや旅館〉は、信越本線直江津駅の駅前旅館であり、八角形の楼塔をもつ洋館風建築として知られていた。須藤は2003年の同じ場所の写真を加えることで、地域の変貌を強調している。本書の第1の目的が、昭和後半期における地域の変容を捉えることにあることは明白であろう。

しかし、地域の変化を時代の変化に乗せて提示するだけでは、単なる懐古趣味にとどまる。宮本にとっては宿泊する旅館もすでに調査の対象であった。彼はここでも旅商人から山間地の医師の分布を聞き取ったり、宿帳から宿泊客を書き留めたりしている。大正期に建設されたモダンなスタイルの旅館で語られる話の主は、近世以前から続く人の営みを体現する旅商人であった。宮本は高度経済成長によりかき消されそうな「遠い過去」を、旅のなかに見いだそうとした。その結果得られたのが、近現代と前近代とが奇妙に接合する〈いかや旅館〉のような空間であった。

これだけでもちょっとした発見であるが、21世紀に在るわれわれ読者からすれば、本書に表現されるこのような空間は、昭和という「近い過去」に属する。ここに本双書の手の込んだからくりが露わとなる。すなわち「遠い過去」の残映として見いだされた景観や民俗を「近い過去」の実態として読むことが、本双書のいわば裏のテーマではなかろうか。それぞれの紀行文は、近代以前と近現代を併存させた、昭和後期のスケッチである。

本書の白眉は須藤功による新潟県山古志村（現、長岡市）の紀行文「山古志村」である。観文研は山古志村からの依頼で地域振興策の立案調査を1970～76年に断続的に実施した。須藤は調査の中心メンバーで、1970年秋から約1年間にわたって村内に居住し、村の暮らしを詳細に観察した。

本章での記述には民俗学的な視点が存分に発揮されている。除雪作業の例からは、村の暮らしを維持してゆくためには共同体による相互扶助が不可欠であること、一方で家普請の共同作業の例からは、共同体的結合が一種の横並び意識を醸成し、生活の改善を阻んでいることを指摘している。また、盆踊りに消極的な青年たちの姿に住民の活力の減退を見て取り、盆踊りは男女の出会いの場だったのに、と妙に鼻息を荒げたりもしている。

本書には佐渡島・伊豆大島・父島の3離島が取

り上げられている。宮本は瀬戸内海の周防大島出身であり、全国離島振興協議会の初代事務局長を務め、離島に対して強い関心を有していた。当時の離島のインフラ整備は遅れ、離島苦の解消にはほど遠かった。観光化に対する期待は高かったが、本土からの隔絶性がそれを阻んだ。

3島のなかでは、伊豆大島をとりあげた「伊豆大島」で、観光化への積極的な取り組みが描き出されている。1960年代後半からの民宿ブームはこの島にも波及し、若い観光客が船で本土から来訪した。この章の筆者である宮本の関心は、地域の変化よりもこの島を訪れる若者たちのスタイルや価値観に向けられていた。駅前旅館で同宿した旅商人からも話を聞く宮本にすれば、観光客はこれまでの話者と同類であったのであろう。

「小笠原——開けゆくBONIN ISLANDS」は、本格的な調査報告としての内容を有している。雑誌掲載は小笠原返還の2年後の1971年1月であり、島の再建が本格化しつつある頃であった。

本章のテーマは特異な歴史的背景をもつ欧米系住民の生活誌である。筆者である姫田忠義の関心は、欧米系住民のアイデンティティの揺れ動きに収斂する。小笠原の最初の入植者はアメリカ人であったが、1882年に彼らは日本国籍を選択した。1945年の終戦で小笠原はアメリカ領となり、68年の復帰でふたたび日本となった。サイパンやグアムともつながっていたアメリカ領時代の方が、小笠原には経済的な発展性があったし、住民はグアムやハワイで高等教育を受けることができたという。本土にいてはまったく理解することができない距離感覚、空間認識がそこにはある。国土の縁辺に位置する外洋離島には、普段意識することのできない「国境」の問題がまわりつく。

民俗学の目とは、現地に出合う人間や景観や物を通じて過去を透視する能力のことであろう。このような目によって見いだされた日本各地の姿、それも約40年前の姿を本書は提示している。評者は東京オリンピックの年に生まれたから、評者にとっての昭和は進歩と発展の時代である。本書に掲載された写真を見ると、それらがすでに過去のものであることを思い知らされる。高度経済成長とともに大きく変貌した昭和後半という時代と地域を、改めて見直す契機となる双書である。

（須山 聡）